学知を深めつつ、多様性への感応力と他者への共感力をはぐくむ

森山工理事・副学長（もりやまたくみ）
1984年東京大学教養学部教養学科卒業。1994年同大学院総合文化研究科博士課程修了。博士（学術）。専門分野は文化人類学。東京大学大学院総合文化研究科長・教養学部長、東京大学執行役・副学長などを経て現職。

東京大学が「大学」である以上、さまざまな分野の学知を学び、深めることは当然のことです。もちろん東京大学でも、入学した当初の学生の特定化された学術分野への関心や志向性を大切にしています。けれども、そうした関心や志向性を踏まえつつも、それ以外の学術分野に学生を晒すことで、学術分野とはこれほどに多様なのだということ、そして、それらの多様な分野の協働によって、さらに新たな学術分野が立ち現れるということを学生に体得してもらおうとしています。

これは学術分野の多様性に学生を晒すということですが、ひとたびキャンパス生活に参入したならば、多様性はさまざまな局面で見いだすことができます。出身地域の多様性。出身文化や言語の多様性。国籍の多様性。ジェンダーや性自認の多様性。年代の多様性。障がいの有無やそのあり方についての多様性、などなど。

学術分野の多様性を架橋するのみならず、そうした「多様な多様性」を意識化し、その多様性を感応力をもって受け止めるには、何よりも他者に対する共感力が必要です。

ですから、東京大学は学知の深化にとどまらないキャンパス生活を学生に提供しようとしています。学術分野の架橋というのは学知の領域のことがらです。けれども、それを踏まえつつ、「多様な多様性」に感応しながら、それらを架橋して他者への共感力をはぐくむこと。東京大学はそのような学修環境をこれからも充実させてゆきます。

東京大学

〒113-8654　東京都文京区本郷7-3-1　入試事務室　TEL 03-5841-1222　https://www.u-tokyo.ac.jp/

学部段階で3つの基礎力を鍛える

藤井輝夫総長が就任初年の2021年度に公表した「UTokyo Compass　多様性の海へ：対話が創造する未来」は、東京大学が目指す理念と基本方針です。「多様性と包摂」の理念を重視し、東京大学を「世界の誰もが来たくなる学問の場」にしていくことを目指しています。藤井総長が特に大事にしている「対話」を通じて新しい大学モデルを構築します。教育においては、東京大学がこれまで人類が受け継ぎ発展させてきた学問の蓄積を学ぶだけでなく、真摯な「対話」の実践を通じて、新たな「知」と「人」と「場」を統合する活動を目指します。これにより、より良い未来社会の創造に貢献する人材を輩出していきます。

東京大学は、特に学部段階では、「自ら原理に立ち戻って考える力」、「忍耐強く考え続ける力」、「自ら新しい発想を生み出す力」という3つの基礎力を涵養します。そのために、学生が最初の2年間を過ごす教養学部前期課程において、基礎科目、展開科目、総合科目、主題科目の4つの科目群で、我が国随一の多様な授業科目を提供しています。

さらに、学生の国際感覚を鍛えます。世界の多様な人々と共に生き、共に働く力の育成にも力を入れています。東京大学は、学生の主体的な学びを促し、世界の舞台で活躍する力を養成する先導的な取組みをいくつも用意しています。

駒場Ⅰキャンパス正門

幅広い教養教育で後期課程に向け「進学選択」

他大学に見られない東京大学の学部教育の大きな特徴は、入学時に専門を決めず教養課程を経てから専門を選ぶLate Specializationに基づく「進学選択制度」にあります。前期課程においては、リベラルアーツ教育[1]を重視し、特定の専門分野に偏らない広い視野と総合的な判断力を養います。そのために、幅広く、かつ専門課程に進むために必要な基礎知識や知的技能を身につける教養教育と、最先端の専門研究に触れ、将来の進路や専門教育への意欲をかき立てるEarly Exposureを教育の2つの柱としています。

東京大学に入学すると、教養学部前期課程の6つの科類（文科一、二、三類、理科一、二、三類）に分かれ、駒場キャンパスで最初の2年間を過ごします。進学先の学部が決まっている学校推薦型選抜（旧推薦入試）の学生や一部の留学生以外は、この2年間の中で、前期課程で得た広範な分野の知見と学びの基礎力を基に自分の適性を見極めます。そのうえで、進学選択制度により、後期課程における自分の進む専門分野の学部・学科などを主体的に選択し、進学先を決定することになります。前期課程各科類から後期課程各学部への進学先はおよそ次ページの図のようなものです。各学部には指定科類以外のどの科類からもそれぞれ一定数の進学を認める「全科類枠」もあります。

初年次ゼミナール

東京大学では、国際感覚を鍛える教育の充実や主体的な学びの機会の提供を進め、前期課程教育の活性化に継続的に取り組んでいます。その柱の一つが「初年次ゼミナール」です。

この授業は「『教え授ける』（ティーチング）から『自ら学ばせる』（ラーニング）への転換」を目指した取り組みの一環として設計されました。大学に入学して最初のセメスターに開講される、全学生が受講しなければならない必修科目です。文科（文科生向け）・理科（理科生向け）とも、先端研究に取り組む様々な分野の教員が、専門性を活かした授業を展開しています。学生の積極的な参加を促すため、1クラス20名程度の少人数制で実施しています。ほとんどの授業に大学院生のTAが付き、丁寧な指導が行われているのも特徴です。授業外にも能動的学習（アクティブ・ラーニング）を支援する体制を整えています。学術文献の検索や研究倫理など、分野にかかわらず共通性の高い内容については共通教材や共通授業で取り上げます。また、大学での学修を早期から伸ばすことを目的にした「アドバンスト理科」、「アドバンスト文科」、「アドバンスト文理融合」という科目群を用意し、例えば、量子コンピューティングやデータ科学などの新しい学術分野における最先端の内容について、演習や討論を含めたインタラクティブな少人数授業を行っています。

英語教育など独自の教育プログラム

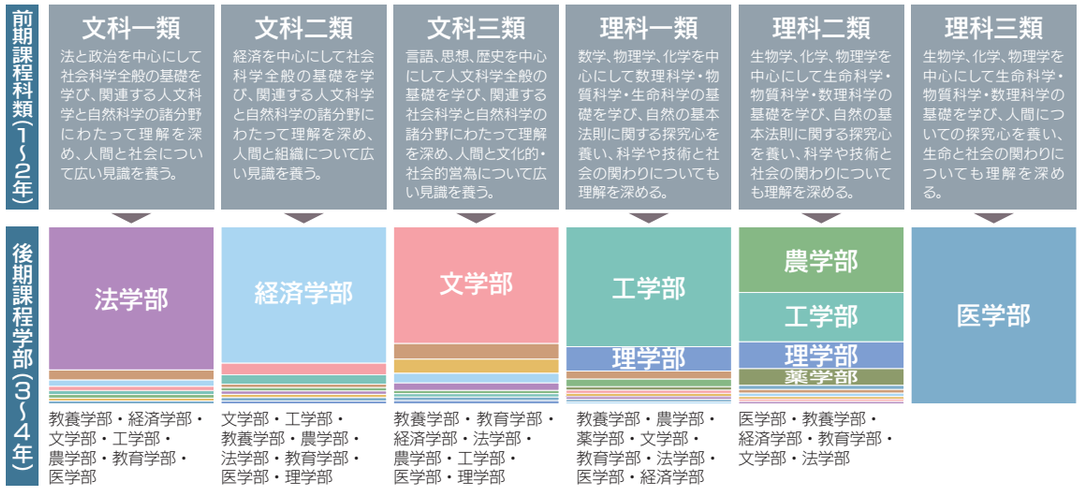
前期課程では、英語教育においても学生の主体的な学びを重視する実践的なプログラムを実施しています。

学術的な文章作成能力を養う少人数授業として、理科生向けの「ALESS」（Active Learning of English for Science Students）と文科生向けの「ALESA」（Active Learning of English for Students of the Arts）を開講しています。さらに、英語で論理的かつ流暢に議論ができるようなスピーキング力の養成を企図した「FLOW」（Fluency-Oriented Workshop）も開講しています。これらの科目は前期課程の必修科目で、全学生がグローバル社会に対応する能動的な英語運用能力の修得を目指します。

また、「主題科目」の中には、異なる言語・文化の環境に触れ、国際交流の現場を体験し、グローバルな視野を養うことを目標とした「国際研修」もあります。授業は、必ずしも高度に専門的なものではなく、リベラルアーツ教育の「総合的な知」の構築を目指す授業内容となっており、学生にとって最初の海外経験を後押しする科目として位置づけられています。

こうした英語による実践的なプログラムを後期課程でも継続できるよう、2023年度に設立されたグローバル教育センターが、「グローバル教養科目[2]」を提供しています。「グローバル教養科目」は、交換留学生を含む全学部の後期課程学生・大学院生が、現代社会が直面する喫緊の課題を英語で学ぶ授業であり、特に「SDGs」（持続可能な開発目標）に関するトピック（ジェンダー、ダイバーシティ、健康、貧困、GXなど）をテーマとしています。

六科類の特徴と学部進学との関係（『東京大学で学びたい人へ 2025』より作成）



※前期課程の各科類から主として進学できる後期課程の学部は上記の表のとおりですが、すべての科類からどの学部にも進学できる枠「全科類枠」が設けられています。

※令和6年4月実績にもとづく

(1) リベラルアーツ教育

「東京大学憲章」にも掲げられているように、東京大学では学部教育の基礎としてリベラルアーツ教育を重視している。リベラルアーツを「種々の制約から自らを解き放ち、自由かつ柔軟に思考するための知識や技芸」と定義したうえで、専門を学ぶ前は「これから学ぶ学問のための土台となり、真理探究の精神を涵養する」ものとして、専門を学んだ後は「自らの専門分野を相対化し、他分野や他者と関連づけながら柔軟かつ責任ある思考ができる素地を培う」ものとして、位置づけている。

(2) グローバル教養科目（GLA：Global Liberal Arts Courses）

東京大学の国際化教育を推進するグローバル教育センターが提供する、現代の世界が直面する喫緊の課題、特に「SDGs」（持続可能な開発目標）に関する分野横断的なトピック（ジェンダー、ダイバーシティ、健康、貧困、GXなど）を英語で学ぶ授業科目。交換留学生を含む全学部の後期課程学生・大学院生が履修でき、原則20名程度の少人数で、ディスカッションなどのインタラクティブな活動を中心に授業が展開される。学問分野や国境などのあらゆる境界を越えて共に学ぶ事を通して、自分の考えを英語で明確に説得力をもって表現する事、異なった意見に耳を傾け、話し合いを通じてより良い道を探る方法を学ぶ事を目指す。

【グローバル教養科目ウェブサイト】
https://globe.u-tokyo.ac.jp/ja/globalliberalarts.html

(3) 国際総合力認定制度（GGG：Go Global Gateway）

東京大学では、世界の多様な人々と共に生き、共に働く力を「国際総合力」と名付けている。国際総合力認定制度（GGG：Go Global Gateway）は国際総合力を伸ばすために、どのような学びや体験が必要かを学生自らが入学後の早い時期から考え、行動することを基本とした制度である。国際的なアクティビティに取り組み、条件を満たした場合に、国際総合力の基礎的な力を身につけたものとして認定証を授与する。単なる語学の堪能さや表層的な外国理解でなく、異文化や他者について深く考える教養と洞察力を修得する契機となることを目的としている。

クラスは、原則20名程度の少人数制で、学生にアクティブラーニングの機会を提供し、変容を続ける国際社会で、存在感を示すことのできるアサーティブなスキルを持つ人材の養成を目指しています。

多彩なプログラムで「グローバル人材」を育成

グローバル化の急速な進展に伴い、国際的に活躍する人材には高度な英語力はもとより、幅広い教養が求められるようになっています。これに対応すべく、すべての学部学生に向けたグローバル教育の取組みとして、「国際総合力認定制度（Go Global Gateway：GGG）」[3]が用意されています。GGGは、入学後の早い時期から学生が世界を意識し、国際的な活動に自ら関わっていく動機付けとなることを目的とするもので、2024年度からは新入学部生全員が入学と同時にシステムにログインできるようになっています。「世界の多様な人々と共に生き、共に働く力（国際総合力）」を身につけることを目指した制度で、指定された条件を満たした学生に、国際総合力の基礎的な力が身についたものとし、認定証を授与します。

海外の大学との交流プログラムとしては、各学部やグローバル教育センターが企画・実施している東大オリジナルの短期留学プログラムや交換留学制度があります。特に、全学交換留学「USTEP[4]」は、全学生が対象で、留学先への授業料の支払いは不要、80以上の協定校に1学期～1年間留学できる仕組みが特徴的です。また、2021年度から新たに開始したUTokyo Global Unit Courses（UTokyo GUC）は、海外の学生向けに英語で行われる短期受入プログラムではありますが、東京大学の学生も参加し、学内で海外学生と共に英語で学ぶことができます。

さらに、東京大学では意欲と能力を有する学生のために、専門分野や国境の枠を超えた多様な学びの機会を提供する学部学生向けの教育プログラム「グローバルリーダー育成プログラム（GLP）」を用意しています。

その一つとして、日本語と英語に加え、もう一つの外国語の運用能力を鍛えるプログラムがあります。複数の言語を深く学ぶことで、言語に関する知見のみならず、世界を多面的に捉える姿勢を養います。

また多様性・包摂性の観点からリーダーシップやSDGsに関して英語で学び、グローバルな体験をして、専門学部の領域を超えた地球規模の課題について考えることで、世界の第一線で活躍できるグローバルリーダーを目指すプログラムもあります。

大講堂（安田講堂）

学びを社会課題につなげ実践力を涵養

学生の自主的な創造力をはぐくむ機会としての体験型活動も活発です。海外での体験や実社会での多様なプログラムを構築し、学生達は自分の関心や目的に合わせて、夏休み期間などを利用して体験することができます。

その一つが、異なる生活や文化・価値観に触れるための「体験活動プログラム」です。これは、数日から1カ月くらいの期間、主に休暇中に国内外を問わず様々な場所でボランティア活動、就労体験、地域活動やフィールドワークに参加し、現地の体験をするプログラムです。2012年度からスタートした本プログラムには、これまで延べ約4500名の学生が参加し、正規の授業では得られない貴重な学びを経験しています。

また、体験型活動プログラムとして「フィールドスタディ型政策協働プログラム[5]」を実施しています。このプログラムは、社会的課題にチャレンジするリーダー人材を育成するため、趣旨に賛同した地方自治体の協力を得て実施するものです。学生は、現場から投げかけられた課題について、現地で体験を積みながら自ら考えると共に、学内のあらゆるリソースを活用して問題解決の糸口を探り出すなど、現地と大学を行き来しながら、一年をかけて課題解決の道筋の提案を行います。2017年度からスタートした本プログラムでは、これまで延べ20都道府県90地域の協力を得て、学生が地域の課題解決に向けて奔走してきました。参加した学生からは毎年、地域の視点に立つことで、日本や世界を見直す機会となった、といった声が上がっています。

インクルーシブキャンパスの実現に向けて

東京大学は、多様な学生構成を目標の一つとして掲げています。その中でも、留学生の存在は重要です。現在、教養学部英語コースPEAK（Programs in English at Komaba）所属の学生を含め、世界各国からやってきた約5000名の留学生が東京大学に在籍しています。まさに世界から優秀な人材が集うグローバルキャンパスが形成され、キャンパスにいながら国際交流ができる環境が整えられつつあります。

多様な学生構成の実現と学部教育のさらなる活性化を目指し、学校推薦型選抜（旧推薦入試）を実施しており、2021年度入試から1校当たりの推薦人数の上限を従来の2名から4名へ倍増させました。学校の授業の内外で、自らの興味・関心を活かして幅広く学び、その過程で見出される諸問題を関連づける広い視野、あるいは自らの問題意識を掘り下げて追究するための深い洞察力を真剣に獲得しようとする人を東京大学は歓迎します。

東京大学の重要な目標に、女子学生を増やすことがあります。そのために、全国7都市での主要大学説明会への参加とは別に、女子高校生のための大学説明会の開催や女子中高生向け進路選択支援活動を行っています。また、在学女子学生による母校訪問の実施、自宅外から通学する女子学生向けの返還義務のない「東京大学さつき会奨学金[6]」、さらに、自宅からの通学が困難な女子学生を対象にした住まい支援[7]など、女子学生への支援体制を拡充しています。

このように、東京大学では教育における独自のプログラムに加えて、学生の多様性を増すことで、さらに活力ある大学を目指しています。

森山理事・副学長からのメッセージ

昨今、世界は地球環境の変動や国際的な紛争、経済の不安定化や社会の分断といった様々な課題を抱えています。このような社会は、Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）の頭文字を取ってVUCA社会と呼ばれています。VUCA社会を乗り切る人材はどのような資質を備えるべきでしょうか。

わたしは、このような社会を乗り切る人材には、少なくとも次の4つの資質が求められるであろうと考えています。

第1は「世界性」です。そこでは多様性や国際性への感応力とともに、人類史と自然史とを大局的に踏まえつつ、将来世代を見通す俯瞰力が必要です。もちろん、地球規模での課題に対する視点がそこには含まれます。

第2は「市民性」です。国際社会・国内社会を含め、社会との交流・連帯・協調・協働に関する資質が必要です。また、東京大学で学修を経たものとしての社会的責任や公正性にかかわる倫理観も重要な資質となります。

第3は「リーダー性」です。専門的な学術を修めつつ、その一方で教養知（総合知）を身につけて、リーダーシップを発揮し、チームワークを主導することによってチーム内の共感力を醸成する資質が必要です。

第4は「創造性」です。みずから独自の発想によって新たな地平を切り拓くことも重要ですし、多様な主体との共感力・対話力にもとづいて新たな地平を構想し、それを協働的に実現する資質が必要です。

このような見通しのもとでは、単純な専門知の深化だけでは対応が不可能な幅広い、ある意味では全人的な資質の涵養が求められるでしょう。東京大学は、このような観点から学士課程を通じた学生の学びに全力を尽くす所存です。

(4) 全学交換留学（USTEP：University-wide Student Exchange Program）

東京大学が、学生交流覚書を締結している海外大学（協定校）と1学期～1年間、学生を交換する「交換留学」を大学全体で実施するものが「全学交換留学（USTEP）」である。東京大学が授業料を徴収せずに協定校の学生を受け入れる代わりに、東京大学の学生は東京大学に授業料を納めれば、留学先での授業料は支払わずに協定校で授業を履修したり、研究指導を受けたりすることができる。全学交換留学は、資格条件を満たす学生であれば、どの学部・研究科の学生でも応募することが可能となっている。

(5) フィールドスタディ型政策協働プログラム

地方自治体から投げかけられた課題に対し、学生が、(1) 県や市町村に出かけ、一定期間滞在し、現地の人達の声を聞き、具体的なニーズを発掘する、(2) 東京大学の多様な研究者や専門家に相談したり、学内の資料などを活用し、さらには仲間と討議熟考したりする、(3) そのうえで課題解決の道筋を自治体及び地域の皆さんに提案する。現地活動にかかる経費の一部を、活動支援金として支給する。

(6) 東京大学さつき会奨学金

本学に入学を志望する優れた女子生徒のうち、入学後に自宅外から通学せざるをえない者であって、経済的な理由により修学困難な者を対象として奨学生の選考を行う。入学前に申請し、候補者として選考されたら、本学入学後に奨学生採用手続きをとることにより正式に採用が決定する予約型奨学金で、一人当たり月額5万円が支給される。東大女性卒業生同窓会「さつき会」のOGの思いから生まれた制度。

(7) 女子学生向けの住まい支援

多様な学生が活躍することのできる支援体制の整備の一環として、本学教養学部前期課程に入学する自宅からの通学が困難な女子学生のために、キャンパスに近く、セキュリティや耐震性が高い安心安全な本学が提携する民間賃貸物件と、本学目白台インターナショナル・ビレッジの居室から100室以上用意し、月額家賃の一部支援（入学から最長2年間、月額最大30,000円を補助）を行っている。

■ウェブサイト『キミの東大』

東京大学高大接続研究開発センターが運営する高校生・受験生が東京大学をもっと知るためのオンラインメディア。東京大学での最先端の研究や本学における教育や学生生活など、東大生の目線も交えながら東大の学びをリアルに伝えます。

https://kimino.ct.u-tokyo.ac.jp/